

共同体社会主義

Socialism Communauté

第6号

大阪市旭区大宮2郵便局留 自由連合大阪
発行 尾関弘

ぼくの集団農場構想

今井真治

岡山市広瀬町2の39

ぼくが共同体的な集団農場をやろうと思いはじめたのは、5年ほど前の高校3年生の時です。高校生活へのやりきれなさみたいなものに反撥し、友達と人ごみみたいなこととして話し合っていました。そのころは前後のみさかいもなく、やってやろうと思ったら、いつのまにかぼくにとって集団農場をやるのが自然のことになってしまい、今日にいたっています。ただこの5年間に、5人はそれぞれ別の生き方を選んで、今では本気で共同体を考えているのは、ぼく1人になってしまった。

2年前に1人でも良いから共同体を求めて農業を始めてやろうと思って土地を捜し始めました。そして去年の夏、以前から気に入っていた南拓村の一画に、親の援助もあって、やっと3haの土地を手に入れました。そこは5~6年手加いっ

ておらず、カヤや笹、さらに雑木が茂っているため、去年の夏から秋にかけてカヤと笹を刈り払い、雑木の一部を伐採しはじめています。それからクリの苗木をもらったので昨秋に百本ばかり植えました。今年は早春にシイタケの植え込み、野菜類の自給、圃場の整備などを考えています。

この南拓地は、岡山県阿哲郡神郷町という新見市の北面にあたる山奥にあります。(いずれは家畜(乳牛と鶏を考えています)を導入して複合的なものにしていきたいと思います。集団農場の形に1日も早くしたいのですが、今のところ一緒にやろうという人はありません。尾関さん加いつかの『月刊キヌツ』に、「共同体が少数の定着による以上にワークキャンプ運動のようなものによって支えられねば」と書かれていましたか、ぼくも

共同体社会主義の毎号ととしてお送りするに、とおと昔号にしておきます

友達は時々手伝いに来てくれます。

共同体観は？と聞かれてもうまく表現できない部分が多く、実際のぼく的生活を見てもらう以外、適宜には示せません。オニに、金をシウのために共同で経営していくという考えには反対です。

オニに、個人では弱いから共同体を作ろうという考えの人にも反対です。一人になってもやれるし、やっていくんだという人達と共同体を作りたいと思っています。オニには、農業や牛が好きだから一緒にやりたいという人をいほしたか、彼らにも物足りなさを感じました。↗

資本主義社会を否定するというんで、実際の生活態度や実際的な向題になると、結局のところ資本主義的な発想をするものです。『農村文化運動』という雑誌で堀越久徳さんが「外部からあつられるということか、その内面構築まで考慮して、この善悪をきめる価値基準まで外部から決定されてしまう。今日では、軍国主義時代のようなパンが強制ではなく、束して強制されていると本人が感じない強制を行う」と書いている。そういうことをなんとか打ち破れないかというのか私の共同体観です。



〈棄民〉対〈常民〉の対決の中から共同体を

日本海の家鳴りの中の小さな村から新春のメッセージを送ります。

尾関さんの「廢村」からの共同体のイメージとはちがひ、ぼくのは「荒野」に開拓する新しい「肉系のムラ」です。それはかって、国家から棄民された満蒙開拓団の人々が、「棄民されたこと」すら気付かずにオニの故郷、オニの故郷と放浪しつつけた戦後の開拓村か、現代日本のなかの巨大な廢墟としてぼくのイメージを規定しています。尾関さんが常民と

してムラ形成することを拒否しているように、ぼくも故郷に棄民されたものです。

ぼくは、観光という名の資本が収奪してしまった擬自然と、体制が支配し収奪してきた擬共同体のなかで一員として疎外されてきました。自己を奪った擬共同体への復讐として、常民に対する怨念として、呪いとして、棄民たちによる新しい差別部落—〈ムラ〉が直接性と戦前性を帯て復活する。あらゆる廢墟に「飯場村」が存在するように、農村は都市に

も存在し得るような流動性をそったムラ
です。棄民対常民という発想による共同
体かほくのものです。

ほくのいまいる寺には、未開拓の山林
があります。水源と小川、雑木林(もとの
畑)、松林、竹林、杉林などブチャ混
せの丘と谷と斜面約1万坪、海から百米
くらい奥の丘陵地帯の一角である。変化
に富んだ利用価値のきわめて美しい、非
経済的なやっかいな空地です。ほくの共同
体はこの空間か発想の源です。

農村は、いわゆる「近代」によって解
体されつつありますが、地縁的な結びつ
きと血縁的な結びつきは依然として強固
に残存している。これらは体制に組み込
まれると、擬共同体として極めて反革命
的な性格を露呈する。ほくの共同体はこ
の擬共同体か作り出す秩序に対して、自
己回復的な攻撃性をもちかねません。
反権力反体制即争の根拠地としての意味、
市民社会の切り込み隊としての遊撃性・
多様性・不定型性……。それにしても、
「おまえへソねえな」と向ければ、や
っぱり「共同体やね」と答えてしまう。
とにかく、暇なときこちらに場所を見

に来てくれませんか。ほくの住んでいる
宿根本という所は、直江津から直接に來
れる港町で、佐渡でも比較的便利な所で
す。 新潟県佐渡郡宿根本 柳道夫

共同体か一体化か

三重県伊賀市春日マアソシズム出版者 織田琢

まだまだ「革命」ということを聞いて、
なにか特別なことでもするかのように思
い込んでいる人々が多い。そのなかにあ
って、尾関さんが「即争に遊びのココロ
の回復か必要なんや」と書かれているの
は、ほくなりにとると、もっと「革命」
を生活化することの必要ということにな
ります。つまりは、自分達かおもしろみ
かしく楽しく生活する。そうしていくこ
とそのほか、何かの形で社会を变革し
ていっている、そういう運動体でなけれ
ばならないということだと思います。

麦社から『乱』というミニコミか出て
いますか、その中にも「政治を考える場
合、政治は生活に支えられていること、
政治の幅は常に生活の幅より狭いこと
を見落してはならぬ」と思います。したか
って運動を支える思想は政治の次元から生

活の次元に降りていく必要があるし、逆に日常生活の思想が政治の次元に上る形で運動の思想が形成されていかねばならぬと思う。— 多くの学生活動家の場合、集会・示威活動と日常生活との間には大きな差をもち、また具体的な動きとして、「創造性と行為の共同性」で結ばれ、慣れ合いではなく不断の緊張関係に支えられた相互媒介的、共同体的関係を志向していきたくと考えていると言っています。

ほくたちもここで集団生活をしているわけですが、彼らのいう「共同体的関係」からさらに「体的関係」へと押し進むことが必要だと思って、そうした拠点を作らねばならないと思います。

共同という「にぎりめし」のような、水にもどせばまたバラバラになってしまうという中身ではなく、「モチ」のような、つけはつくほどつながりが強くなって別れられない、「どこまでもやろうぜ」という関係、人間とはもともとそうではないかと思います。「共同」「協同」から「一体」へとということでしょうか。

そして自主生産をし、自分たちで国家

の入り込めない社会的空間をつくる。そのなかで先取りした社会のモデルをつくり、またこわし、またつくりというように、その空間を拡大していく作業、それをするのが生活そのものになっている。メシを食う、糞をたれる、何かをする、その生活の— コマーコマまでを反体制、反国家という基盤の上でなされなければならぬでしょう。

あとがき

~~~~~

今号では個人的に送

られてきた三通の手紙を紹介しました。それぞれの人には無断でしてしまいましたのでここであやまっておきます。カン、

次号から紹介したい共同体関係のミニコミは、「衆書通信」(ヤマギシ会春日) / 「北海通信」(ヤマギシ会北試) / 「垢」(北野くんの個人新聞) / 「消費者自給牧場」(おしん乳を飲む会東京) / 「けんさん」(ヤマギシ会神奈川) / 「ホロと水」(ヤマギシ会福岡) / 「はんせん馬天嶺」 / 「あらくさ共同体」(ひろお連合) / 「拠拠」(ひろお連合) / 「地下通信」(もぐら社) / 「もぐら社私信」(福岡県くんの個人紙) / 「カティマ」(ヤマギシ会福岡) / 「劇的なる衣装をめぐって」 / 「無政府主義」 / 「木の葉経」

その他無数 宛先は紹介する